

うきたむ

第9号

1997. 6. 10

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高島町大字安久津 2117 TEL (0238 - 52 - 2585)
FAX (0238 - 52 - 4665)



編布（アンギン）を編む 96年2月23日（編布づくり教室）

考古資料館に期待する

山形県教育庁文化財課課長

島貫 雄行

日本列島の人類は前期旧石器時代の宮城県上高森遺跡以来数十年前まで遡ることがわかってきました。私たちはこの悠久の歴史のなかで「今」を生きています。

最近の考古学（大半が開発に伴う緊急発掘調査ですが）の成果をみると、卑弥呼の時代を彷彿させる佐賀県吉野ヶ里遺跡、「縄文」のイメージを大きく変えた青森県三内丸山遺跡、さらにさかのぼること数千年、四〇教棟の縄文時代早期の集落が姿を現した鹿児島県上野原遺跡等々、新聞やテレビでは毎日と言っていいほど遺跡のニュースが流れます。

私たちは、茶の間や職場で身近にこれらの情報を得、そのたびに新しい驚きを感じています。また、これら遺跡の説明会などには何百人もの人々が訪れ、直に触れ、その場の空気を吹い、遙かな遠い時代に想いをはせる…そしてこれがまたニュースに。多くの情報から自ら興味を覚えることを選択し現場へ赴き体験する。このような「文化」への需要に対し、本県でも博物館や当考古資料館の役割は今後さらに大きくなると予想されます。

当資料館は館長以下、限られたスタッフですがこれらの要望に応えるべく、積極的に取り組んでいます。資料の展示や館内の活動にとどまらず、直接触れ、見、歩くといった体験的な活動を数多くおこない、子どもから大人まで楽しみながら学習できる「基地」となるよう期待しています。また今年完成する資料館周辺の高島町「まほろば古の里歴史公園」と一体となってさらに楽しい活動の場となるよう県としても努力してまいりたいと考えています。

考古資料からみた

—古代・中世—

テーマ展開かる

日本の国が誕生する五・六世紀から、戦国時代が終る一六世紀までの考古資料のなかで、最近発見された遺物を展示している。新しい視点から古代・中世の地域の歴史を、より豊かにとらえていただくことをねらいとして、九月二十五日までの長期にわたって開催している。文字によって書かれた歴史を、さらにイメージ豊かにえがくために役立つことができれば幸いである。

古墳時代のくらし

前方後円墳などの大きな古墳がつくられた時代に、古墳つくりに関与した多くの人びとはどのような暮らしをしていたのであろうか。

高島町の西側の平地部で、国道バイパスの建設にともない、南原や寝鹿などの古墳時代後半の大きな集落跡が発掘されている。両遺跡から出土した当時の土師器といわれる土器を中心に展示している。壺や甕鉢など貯蔵や煮沸に使われた器、高坏や坏などの食器類、米を蒸すのに使われた甑（こしき）などが器

古代の役所と人びと

七世紀後半には置賜地域も、日本の国家体制にくみ入れられはじめ「優曇曇郡」と呼ばれ、陸奥国に属していた。七十二年の「出羽国」の建国にともない陸奥から出羽国の一部になる。

郡の役所である郡家は、当初高島町小郡山に置かれたらしいが、さらに郡山（南陽）→大浦（米沢）→道伝（川西）と移転し、一〇世紀頃まで機能していたと思われる。

役所や寺院で使われた陶硯類、建物の屋根にあげられた瓦類、七世紀後半から八世紀代に出現

する須恵器、郡の百力な人びとを葬った古墳から出土した直刀や三累環という珍しい刀の柄を飾るもの、文字を書いた墨書土器などが展示されている。

中世の人びとと信仰

武士が登場し、大きな勢力をもってくる中世は、人びとの信仰があついていた。

経典を埋納した塚塚間係遺物、墳墓から出土した骨蔵器、板碑などの供養塔婆が展示されている。

さらに広域な交流をものがたる中国の陶磁片、瀬戸・美濃・唐津などの陶片は貴重である。

それに県内からも大量に出土をみる銭貨は、貨幣経済の流通を示している。火鉢や内耳土鍋などの日用品、米沢市戸長里窯から発見された陶片や窯道具も並べられている。これらによって中世の人び



満喫度一〇〇パーセント

平泉への旅終る

六月二一〜二二日の「黄金の都 平泉」への研修旅行は、三名が参加。地元の研究者の案内で、観光旅行とは一味違った歴史を訪ねる旅であった。古代東北に栄えた文化とその背景を考えさせられた。宿では全員で「ふるさと」を合唱するなど、楽しく有意義な探訪の旅であった。



「まほろば縄文まつり」など

今年も多彩な行事

「うきたむ風土記の丘写生大会」や春の遺跡めぐりなどの行事は、すでに五月中に行われ、いずれも成功のうちに終了した。

六月一日には公開講演会、二日にはうきたむ考古の会主催「黄金の都は藤原文化のふるさとを訪ねる」岩手県平泉などの研修旅行が行われる。

また秋の遺跡めぐりは、一月九日松たけごはんを賞味しながら、高島町和田地区に中世の遺跡を訪ねる。

魅力ある行事がめじる押しでつづいている。



春の遺跡めぐり 5月18日

夏には、自由研究相談日、(八月六・七日)、夏休み親子で遺跡探検(八月一七日)などが予定されている。

秋には、土器づくり教室(九月一四日)、公開講演会(十月二六日)の他、はじめてのころみである「まほろば縄文まつり」が開催される。

今年の十月と十一月には、米沢市教育委員会の協力をえて、「一の坂・台の上遺跡展」が開催される。

米沢市一の坂遺跡は、昨年国の指定史跡となった。全長四三・五メートルの日本最大のロングハウスや軒を接して並ぶ連房式

縄文のふるさと

「一の坂・台の上遺跡展」

今秋の企画展

堅穴が発見されて注目されるところとなった。六〇〇年前縄文前期初頭の土器や製作工程を示す石器類などが展示される。

また米沢市吾妻町に所在する台の上遺跡は、四五〇〇年以前の縄文中期前半の大規模な集落跡で、堅穴住居跡多数に加え、



昨年秋の「縄文月見の宴」

米沢市の古墳 ①

―成島・宝領塚・戸塚山古墳群―

県南の中心都市、上杉氏の城下町米沢市には県内有数の古墳が分布する。市の中心部にはないが、まわりの旧村、とくに北部の上郷や窪田地区に多い。

先日「春の遺跡めぐり」で、市教委の手塚孝さんの案内で一日、米沢市の主な古墳をめぐつ

た。五月のさわやかな風に吹かれて新緑の樹々をぬって歩くのはとても気持ちよかった。

はじめに訪れたのは、市北部に位置する「成島古墳群」。これは成島八幡神社裏の丘陵にある。確認されたのは、最近のこととて、六年ほど前のことである。



戸塚山山頂にて

前方後円墳一基と方墳五基からなる。二号墳である前方後円墳は、全長六〇メートル、後円部の直径が三メートル、前方部との比率は五対五になるから、均整のとれた美しい形をしている。後円部三段、前方部二段の構築であ

る。南陽市稻荷森古墳について県内では二番目の大きさの前方後円墳である。これがつくられた年代については五世紀前後とする見方と、もっと新しく六世紀前後とする説があり、その間百年のへだたりがある。方墳は一〇メートルから一八メートルの大きさで、置賜盆地の最上川より西に勢力をもっていた豪族らの墓であったと思われる。

この西方の盆地内平地部、窪田集落の西側水田中に「宝領塚古墳」がある。いま前方部は失われたが、五・四メートルの後方は高さ五・四メートルで、全長は八〇メートル近くあったと推測される。

置賜の古墳の始まりは、前方後円墳にあつたと考えられるから、四世紀後半に県内で最初につくられた首長墓であつたろう。川西町天神森古墳と同じ時期か、それよりは少し古い時期のものかもしれない。

米沢市の北にそびえる標高三五六・六メートルの戸塚山は東西に横たわる独立した山で、この山頂や山麓部には一九八基の古墳が認められ、東北有数の古墳群である。山麓部の小円墳群は七つほどの支群からなり、横穴式石室がとり入れられてから

後の七世紀以降のもので、裾を接するようには密集して分布がみられる。現状では盗掘されたものが多

い。麓から尾根へ、尾根道を上ること三〇分で山頂に達する。眼下に置賜盆地北部が一望のもとにひろがる。ここには全長五四メートルの前方後円墳(二三九号墳)と二四メートルぐら

いの帆立貝式古墳(二三七・一三八号墳)が並んで尾根上にみられる。

一三七号墳は、一九八二年米沢市教育委員会によって発掘調査が行われた。その結果、箱式石棺が発掘され、その中から埋葬された人骨と刀子一本、豎櫛三点が出土した。人骨は壮年期の女性のもので、身長一四五センチぐらいであることがわかった。この近くに一四〇号墳である方墳がある。



宝領塚古墳

